

COIL プロジェクト報告書

広島とプノンペンの歴史の継承に関する 比較研究

—Comparative Study on Succession of the Tragedy to Next Generations
: Hiroshima and Phnom Penh's Experience—

グループ C メンバー : 石原佳歩、黄瀬千奈津、橋本拓夢

1. 研究目的

本研究は、近年注目されてきている歴史の継承という課題に着目し、広島原爆体験とプノンペンを中心とした民主カンボジアによる虐殺体験がそれぞれどのような方法論を取っているのかという現状把握、そして今後の方法論について比較検討することを目的とする。

広島では被爆 74 年目を迎えており、生存者は年々減少傾向にあることは周知の通りである。一方で、民主カンボジアによる虐殺の歴史は 1975 年からの 5 年間で当該時期にあたるため、広島と比較すればこちらの生存者は比較的若いということができよう¹。しかし、共通しているのはいずれの歴史も、生存者がゼロになる日は来るということである。同じような悲劇が繰り返されぬよう、次世代への継承は重要な課題であり、その方法論を検討することは一定の意義があるように思われる。

そこで、本研究は広島とカンボジアの比較をベースとして、①博物館（資料館）の比較検討、②口頭伝承プログラムの比較検討、③携帯アプリケーションの比較検討、をメンバーで分担して行い、これらの考察を踏まえ、次世代への継承方法を考えていくことにする。

2. 研究方法

- ① 広島平和資料館と Tuol Sleng 博物館（以下、S-21）の概要比較
- ② 口頭伝承プログラムの概要比較と広島市被爆体験伝承者養成事業の紹介
- ③ HiroshimArchive と App-learning on Khmer Rouge History の概要比較
- ④ ①～③についてのまとめと考察

3. 研究成果

- ① 広島平和資料館と Tuol Sleng 博物館（以下、S-21）の概要比較

【Tuol Sleng Genocide Museum】

虐殺博物館は 1975-1979 年に発生したカンボジアの虐殺に関する種々の記録を展示している博物館である。かつて小学校であり、当時は監獄として使用されていた建物を用いている。展示構成は主に以下の 3 つに分類される。

①常設展示

常設展示では主にクメールルージュの S21 内での戦争犯罪についてフォーカスした展示を行っている。

②特別展示

本博物館では、少なくとも年に 1 回の特別展を行っている。その理由はクメールルージュ時代をさまざまなトピックから見て、過去に対する意識を高めるためである。

③モバイル展示

この展示方式は移動授業形式で行うものである。カンボジアのさまざまな学校に展示を持ち込み、若い世代にクメールルージュの歴史について学んでもらい、平和の価値と自国の団結意識を理解してもらうことを目的としている。

¹ ただし、生存者の年齢が若いとはいっても、S-21 の生存者が数名であるという事実には留意する必要がある。さらに、S-21 ばかりが注目されるがカンボジア全土にも収容施設が存在したことにも留意する必要があるだろう。



The Common Wanderer

【広島平和祈念資料館】

広島平和記念資料館は 1949 年に制定された広島平和記念建設法の下、1955 年に建設された。本館と東館の 2 つの建物で構成されており、広島平和祈念公園内に位置している。2017 年度の来館者は 170 万人である。展示構成は 4 つに分類される。

①特別展示

年に 2 回の特別展が東館で行われている。

②新着展示

被爆資料の収集、保管に努めている。今もなお、被爆者やその遺族から資料の提供がある。2017 年度は新たに 61 人から 784 点の寄贈があった。

③芸術展示

原爆や戦争をモチーフにした絵画やオブジェなど、種々の芸術品を展示している。

④常設展示

広島のみならず、原爆投下や原爆そのものについてまで、包括的に解説を行っている。



hpmuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=20#east-facility
 なお、本館は現在工事中である。

② 口頭伝承プログラムの概要比較と広島市被爆体験伝承者養成事業の紹介

第1部で紹介のあった2つの博物館では口頭伝承プログラム（証言者プログラム）が行われている。これらの概要を各博物館のホームページを参考にまとめた表が以下に示した表1であるので参照されたい。

表1 口頭伝承プログラムの比較対照表

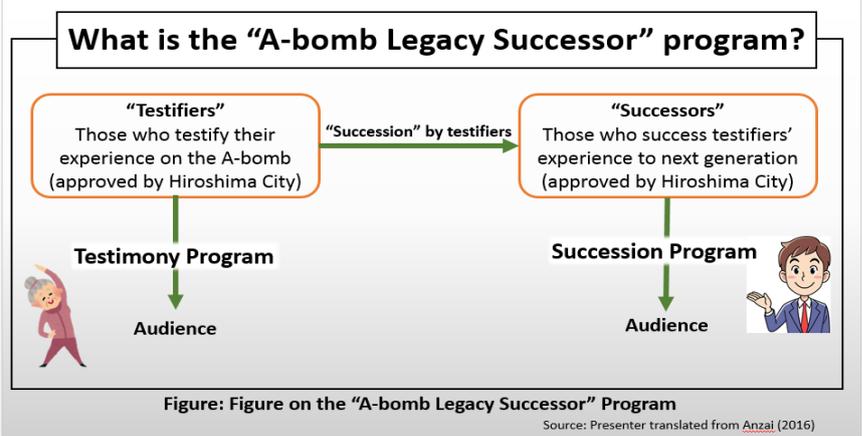
	原爆投下 (1945) 広島平和資料館	民主カンボジアが政権を握る (1975) S-21
概要	被爆者が彼らの被爆体験や、原爆に関する歴史を述べる。 An A-bomb survivor describes his or her own A-bomb experience and the facts about the A-bombing.	2015年に創始され、同プログラムはS-21の生存者が彼らの体験を共有するプラットフォームの役割を有する。 First created in 2015, the Testimony program provides a platform for survivors of S-21 to share their stories with the public.
証言者の年齢	80歳前後	50歳前後
料金	6000-10000円	n.d.
時間	1) 9:30 to 10:30 2) 11:00 to 12:00 3) 13:00 to 14:00 4) 14:30 to 15:30 5) 16:00 to 17:00	14:30 to 15:00

出典) Hiroshima Peace Memorial Museum HP (<http://hpmuseum.jp/?lang=eng>)

The Tuol Sleng Genocide Museum HP (<http://tuolsleng.gov.kh/en/education/>)を参照し筆者作成。

このように、伝承方法として口頭伝承がどちらの博物館でも行われているのは興味深い²。しかしながら、証言者の年齢を見て明らかな通り、今後 10-20 年の間で証言者の数が激減することは免れないと思われる。そこで広島市が中心となり、2012 年から取り組みが始まっているのが「広島市被爆体験伝承者養成事業」である。同プログラムは 3 年の養成教育を修了した者を市が伝承者として認定し、平和資料館内を中心に伝承活動を行うことができる。以下に同プログラムを概観的に図示した³。

図から読み取れるのは、平和資料館では証言者プログラムと伝承者プログラムが現在並立して行われているということである。筆者の調べた限りにおいて、証言者プログラムは予約をした上でやや高い金額を支払うのに対し、伝承者プログラムは予約不要でかつ無料で受講できる。



さらに、伝承者プログラムの特質として、伝承者が証言者の体験を証言者自身によって伝承され、それをそのまま聴衆へ語り継ぐのは興味深い手法である。ここには、伝承者の主観が極力入り込まないよう、純粋な語り（伝承）を意図しているものと推察できる。

さて、上述した 3 年間の養成教育は大別すれば次のようになる。

- 1 年目：証言者による講義の受講、話術の習得、原爆についての学習
- 2 年目：証言者とのマッチング、証言者から伝承者への伝授
- 3 年目：聴衆を前にした実習

2 年目において、広島市から認定を受けると、3 年目の実習段階へ進むことができ、3 年目を終え広島平和文化基金から委託を受けることによって、伝承者としての職務遂行が果たせるものとなる。

現在では全国からの修学旅行生らを主な対象とする一方で、逆に出張要請ということで関東地方の学校へ出向いたりもしているという。これらの交通費や謝礼等は広島平和文化基金の方から支払われており、比較的財政的に厳しい公立学校の場合でも、伝承者を活用したカリキュラムを組めることは重要であると考えられる。

このように、広島市では口頭伝承プログラムとして、①証言者プログラム (testimony program) と②伝承者プログラム (successor program) を並立させ、近い将来①が成立しなくなっても、②を活用することでリアリティーのある語りを続けていこうという取り組みが見られ評価できよう。

しかしながら、今後この養成プログラムを終了した伝承者たちが、さらに次の世代の伝承者を養成するとなった時、例えば語りの内容の精密さに関する課題等の生じるものであると予見ができよう。

² 私たちが S-21 を訪問させていただいたのは、午前中であったため当該プログラムは受講できなかったが、生存者が書籍の販売や写真撮影に応じている状況に遭遇した。一種のビジネスとして活用されているようである。
³ 王立プノンペン大学でのグループ C 発表資料より。

③ HiroshimArchive と App-learning on Khmer Rouge History の概要比較

日本とカンボジアの悲劇的な戦争の歴史を次世代に継承するにあたり、それぞれの国では博物館を設けたり、口頭伝承を行ったりするのに加えて、IT を使って記録や記憶を伝承していく方法を実践していた。今回のプロジェクトでは、IT の中でも、特にスマートフォンのアプリケーションを使って歴史を保存していく方法に着目した。アプリケーションには、だれでもいつでもどこでも情報にアクセスできるという利点があり、ターゲットはスマートフォンやタブレット端末を持っている若い世代ということになる。

まず、広島原爆の歴史を伝えるアプリケーションについてである。日本で原爆の悲劇を伝えるアプリケーションがないか探したところ、被爆者の体験と想いを保存し残していくという目的で、「HiroshimArchive」というアプリが見つかった。このアプリは大学教授と広島県内の高校生などの学生たちのボランティアで作られたもので、原爆が投下された当時の写真や被爆者のインタビュー記事・動画を見ることができる。それゆえ、このアプリケーションはアーカイブの機能がメインであるといえるだろう。このアプリケーションの特徴としては、広島市内のマップの各所にアイコンが配置されていて、それをクリックすると記事や写真を見ることができるようになっている。マップは通常の地図、1945年の航空写真、現在の街の航空写真である。さらに、「HiroshimArchive」にはARモードというものがあり、広島市内に行った際には道路を歩きながら、原爆の歴史が残る場所を知ることができる。

次に、カンボジアのクメールルージュの歴史を伝えるアプリケーションについてである。このアプリケーションは「App-learning on Khmer Rouge History」というもので、プロジェクトの事前ビデオ会議で王立プノンペン大学のドン先生の紹介により知った。このアプリケーションは、ボパナ視聴覚リソースセンターという NGO によって作られたもので、アプリケーションの開発にはドン先生や日本人の方も関わっている。アプリケーション開発の目的としては、若い人たちにクメールルージュの歴史を伝え、教育することの補助というのがメインであり、教科書的な役割もある。「App-learning on Khmer Rouge History」は全部で8つの章と補足の章で構成されていて、1つの章も複数のパートに分けられている。その各パートは記事と動画で構成されていて、クメールルージュの歴史を細かく学ぶことができるようになった。

以下は、「HiroshimArchive」と「App-learning on Khmer Rouge History」を比較したものである。各アプリケーションに目的などの違いはあるが、共に技術を活用した伝承方法である。

表2. アプリケーションの比較対照表

	HiroshimArchive	App-learning on Khmer Rouge History
作者	大学教授、広島県内の学生(ボランティア)	ボパナ視聴覚リソースセンター (NGO)
目的	後世に被爆者の経験と想いと残す (アーカイブ)	若い世代にクメールルージュの歴史を伝え、教育する (アプリでの学習)
内容	経験談 (記事または動画) と当時の写真	歴史を伝える文献と動画

<p>特徴</p>	<p>広島市の地図上にアイコンが配置されている。アイコンをクリックすると、内容が見れるようになっている。</p>	<p>8つの章と補足資料で構成されている。クメールルージュの歴史を詳しく学ぶことができる。</p>
<p>アプリのイメージの一部</p>		

また、参考までに、他の IT での伝承方法を調べてみると、広島県ではオンライン平和学習と称して、「広島から平和を考える」というオンラインで学べる講座を開講していた。この講座はだれでも無料で自由に受けることができ、広島の前爆の歴史を学んだり核兵器をめぐる国際情勢について考えたりすることができる。またこの講座を修了すれば修了証書も受け取ることができるということが分かった。

4. 考察

以上①～③をまとめ、考察すると次のようなことが言えるだろう。

まず、日本とカンボジアにおける共通点として、次世代への継承は重要なテーマであり各国それぞれにおいて新しい取り組みが見られるということが指摘できる。その証左として、Royal University of Phnom Penh のドン先生は私たちの報告に強いご興味を示してくださった。

しかしながら、ドン先生からご質問の1つにカンボジアのケースにおける広島市の「伝承者養成プログラム」の導入可能性に関するものがあつた。私は答え方に戸惑ってしまった。確かに、経験世代の高齢化に伴う証言講話を聞ける機会の減少は両国に共通するものの、歴史の内実はかなり遠いものと認識していたからである⁴。もちろん、私たちの歴史認識が不十分であることは間違いないが、「比較の視点」を十分に取り入れることができなかつた、すなわち双方の歴史に通底する普遍的な議論を考慮することがで

⁴ 簡潔に例えるなら、原爆は米軍（外部者）によって投下されたが、カンボジアの虐殺は思想の違いにより同じ民族（内部者）に起因する。正直あげたらきりが無い。

きなかったと痛感している。

とはいっても、両国の情報を整理した上で、現地に滞在し、実際にカンボジア人からフィードバックをいただけたという経験は紛れもない事実である。今後も、メンバー各々の専門分野や視点から平和について考え続けるきっかけになるものと確信している。

5. 個人の感想

【橋本分】

カンボジア・スタディツアーに参加するにあたり、学部時代を通して自分と縁深かったタイ王国との関係という観点を持ってカンボジアを見つめてみることにした私にとって、今回の渡航は非常に実りの多いものであったと感じるところがある。以下に体験を踏まえた上で考察を行いたい。

CLMV の国々は国家が不安定な状態が比較的近年まで続いたため、ASEAN には後から加盟することになる。上述のようにカンボジアは冷戦時から DK 時代にかけて国家が不安定な状態が続いた。

JICA 事務所訪問時に、セミナー室の壁に大々的に貼ってあったのが南部経済回廊と SEZ を示したカンボジアの地図であった。バンコクを出発し、プノンペンを経由し、ホーチミン・シティへ抜ける同経済回廊が開通すればインドシナ地域におけるカンボジアのプレゼンスはさらに向上すると考えられる。

このように、ASEAN 域内における経済協力の体制が整備されてきている一方、文化や国民感情を巡る対立は根強いものが存在すると推測される。

筆者自身現実のタイとカンボジアの国民感情は激しくぶつかりあっていると本プログラムを通じて感じる事ができた。その理由は次の諸点である。まず第 1 に、START+側についていた通訳さんの発言である。私がタイ語を少しかじっていることから、タイ数字とクメール数字がかなり共通していることを指摘すると、すかさず「インドからその文字を最初に受容したのはカンボジアであって、タイはそれをまねている」との返答を受けた。第 2 にアイデア・マインニングセミナーでも取り上げられた、Lkhon khon の踊りを巡る対立である。プレゼンターも UNESCO が危機遺産への認定に関するツイートにあたり、タイの方により華やかそうな写真を用いたことからカンボジア青年たちの逆鱗に触れたことを紹介していた。

ここから推測されるのは、両国における歴史的な対立から来る国民感情が、結果として文化的にどちらが優れているのか、といった議論に飛躍している現状である。

そもそも、文化に優劣などつけられるのだろうか。カンボジアの方が先にインド化し強大になったから偉いとか、そういう次元の話ではないように思われる。一方で、文献からの情報であるがタイ人側もカンボジア人を見下しているという状況が少なからずあるようで、今日 ASEAN 各国で普及が進められているアセアンネス教育への期待が高まる⁵。

【黄瀬分】

私はこのプロジェクトで両国の博物館の比較をしたが、これは決して優劣をつけるためでない。展示方法ひとつとっても、国の文化や国民の気質によって相性があると思う。そのため、この発表が互いの戦争記憶の維持にとって効果的な方法を取り入れるきっかけになればうれしいと感じた。そうすれば、平和に関

⁵ 柿崎一郎『物語タイの歴史—微笑みの国の真実—』中公新書、2007 年を参照。アセアンネス教育については平田利文編著『アセアン共同体の市民性教育』東信堂、2017 年が詳しい。

する意識がより定着すると思う。

今回のプロジェクトを通じて、平和とはひとりひとりが当事者意識を持って構築していくもので、そのアプローチ方法は無限にあると感じた。さらに平和に関する意識を強く持って今後過ごしていきたい。

【石原分】

私は PEACE プログラムでの留学が終わってから、このプロジェクトの当初の目標は平和について考えることであり、平和の概念は人それぞれで難しいと思っていたことを思い出した。自分にとっての平和は、命を脅かす問題が比較的少ない環境の中で、平和について意識せずに生きられることだと思っていたが、平和を意識するにあたって、過去の歴史や戦争について考えることも大切であることを学んだ。自分たちは負の遺産の継承や次世代に伝える方法を探るということを通して、過去の過ちを繰り返さないように、また平和について考える機会を絶やさないように、ということを考えてが、どのグループも異なる視点で平和について考えていて、非常に興味深かった。平和をはかる指標はたくさんあったが、過去を知って次の世代に伝えたり、今の子ども達の現状に目を向けてみたりするといったことが大切だということはこのプロジェクトを終えて改めて感じた。自分は特に IT といった情報技術を活用して後世に歴史を継承していく方法を調べたが、広島とプノンペンで IT がうまく機能しているかどうかはわからなかったし、今後戦争などを経験した人がいなくなってしまったあとがより一層問題になると感じた。これからも継承に関しては新たな方法を探り、各個人が当事者として平和について考えることの大切さが分かったし、このプロジェクトが終わっても自分自身で平和について考えることをやめないようにしようと思う。

6. 参考文献・URL

- ・ Ministry of Internal Affairs and Communications (2012) “Policy on activation of Local Administration Organization”
- ・ Akiko Anzai (2016) “Telling Others’ Memories: An Overview of the A-bomb Legacy Successor Program of Hiroshima city and their stories” Aoyama journal of social informatics, vol8, pp27-45.
- ・ Hiroshima Peace Memorial Museum HP (<http://hpmmuseum.jp/?lang=eng>) (最終アクセス：2019/04/02)
- ・ The Tuol Sleng Genocide Museum HP (<http://tuolsleng.gov.kh/en/education/>) (最終アクセス：2019/04/02)
- ・ Hiroshima Archive ヒロシマ・アーカイブ (http://hiroshima.mapping.jp/index_en.html)
- ・ オンライン学習講座「広島から平和を考える」受講者募集(<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/peace-onlinelearning.html>)